

2013年3月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 奥義への道

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「安楽行品」

### 1. 安楽行品の概要

(1) 文殊師利菩薩の問いに答える形で、釈迦牟尼世尊が四つの安楽行を説きます。

① 身安楽行

- ・ 行処
- ・ 初(はじめ)の親近処
- ・ 第二の親近処

② 口安楽行

③ 意安楽行

④ 誓願安楽行

(2) 髻中明珠(けちゅうみょうしゅ)の譬えが説かれます

### 2. 安楽行とは

(1) 安楽行とは

「安」は心が安らかなこと、「楽」はみずからすすんで行うこと、「行」は菩薩としての行ないのことです。「安楽行」は、安らかな心で、みずからすすんで、菩薩としての行ないを続けるという意味になります。

(2) 困難との遭遇

勤持品で学んだとおり、菩薩としての行いを続けるためには、数々の困難と向き合い、乗り越えなければなりません。

そうした困難に遭遇しても、安らかな心で自ら願って困難に向き合い、菩薩としての努力を続けていくのが、安楽行です。

(3) 安らかな心境になるには

法華経の教えを心から信じ、身に行なえば、いかなる困難をも超越した安らかな心境にたつてすることができます。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.141)

(4) 安らかさが具体的にあらわれる

色心不二の法則によって、その安らかさは身体の上にも生活の上にもあらわれてきます。(同)

(5) 涅槃

仏教における「安らかな心境」の極致は涅槃です。貪欲・瞋恚・愚痴・慢心・疑惑などの迷いの心が静かになり、正しい智慧が生き活きとはたらいっている状態です。

### 3. 行処

#### (1) 「行処」とは

「行処」とは、自分自身の身の振る舞いについての基本的な心得です。

#### (2) 「行処」の内容

- ① 忍辱の心が確立している。(忍辱とは、害悪を加えられても、褒めそやされても、心を乱さないことです)
- ② 真理に従いながら柔軟性がある。
- ③ 慌てた振る舞いや乱暴な振る舞いをしない。
- ④ 現象にとらわれてものごとを行なうことがない。
- ⑤ ものごとにおける原因・条件・結果・影響の関係を見定め、正しい判断をして行動する。

### 4. 親近処

#### (1) 「親近処」とは

「親近処」とは、世間の人々との交際において必要な基本的な心得です。

#### (2) 「親近せざれ」とは

この経文には、「親近せざれ」と繰り返されています。「このような人々には親しみ近づくな」ということです。

まだ、自分が未熟であり、ふらついているときに、エネルギーの大きい人に近づいたり、強い誘惑に出会ったりすると、ずるずると真理から外れてしまいます。そうならないようにと、戒められているのです。

#### (3) 初の親近処

「初(はじめ)の親近処」では、世間の人々と接するときの心構えや態度が示され、例があげられています。初心の菩薩に対する注意であると思われます。

- ① 地位が高い人、権力を持っている人、有名な人、世間でもてはやされている人などに、求める気持ちを持って近づくことは慎みましょう。
- ② 宗教指導者、信仰指導者、人生指導者、社会指導者などでありながら、自分・他人・世間のすべてを幸せにするための道を説かない人々に接するときは、巻き込まれないように気をつけましょう。
- ③ 特殊な仕事をしている人々には、特殊な雰囲気があるものだから、それに巻き込まれないように気をつけましょう。
- ④ 異性と会うときは、誰に見られてもよい場所を選び、きちんとした態度で向き合しましょう。
- ⑤ 自分の責任で人々と接するときは、真理の道を念じながら、向き合しましょう。

#### (4) 第二の親近処

「第二の親近処」は、人々に対する根本的な姿勢が述べられています。

- ① 目の前に表れている現象は、原因・条件・結果・影響の原理で動いていることを見定めます。
- ② 世間の人びとは、原因・条件・結果・影響の原理を知らないために、現実を見誤ってしまうことを理解します。
- ③ 世間のすがたを見極めながら、真理に従って行動します。

### 5. 口安楽行

言葉の振る舞いについての心得です。

#### (1) 慎むべき言葉

- ① 人の欠点を掘り出したり、書物などのあら探しをするのは意地悪で卑しい行為です。
- ② 他人の短所をあげつらって批判するのは、その人のためになるときや、社会のためになるときだけにすべきです。怨み心や嫌悪する心を起こして非難したりすることは避けるべきです。
- ③ 他人の長所を取り上げて褒めそやすのも、その人のためになり、社会のためになるときだけにすべきです。

また、本人が慢心を起こさないように、聞いた人が嫉妬心を起こさないように、気をつけるべきです。

#### (2) 心の迷いと言葉

心の迷いから悪い言葉を吐き、吐いた言葉が心の迷いを増長させます。言葉は気をつけて使わなければなりません。

#### (3) 人に教えるときの心構え

- ① 人にものを教えるときは、自分の身も心も浄らかにして、相手に向かってください。
- ② 相手の知りたいことを理解して、教えてあげてください。
- ③ 相手が地位の高い人や権力を持っている人であろうと、普通の人であろうと、真理に合った内容を、和やかに教えてあげてください。
- ④ 相手に応じて、実例を用いたり、たとえ話をしたりして、だんだんに真理に近づけるように教えてあげてください。
- ⑤ 教えてあげたのだからお礼をよこせというような心を起こさないで、教えてあげてください。
- ⑥ 教えてあげるのは、ただ、相手が成長して立派な人になってもらいたいからだとすることを忘れずに、相手と向き合ってください。

## 6. 意安楽行

心の振る舞いについての心得です。

### (1) してはならないこと

- ① 真理を実践して自分を高めようとする人は、嫉妬心、諂(へつら)い、誑(たぶら)かしのような心を起こさないように気をつけてください。
- ② 自分を高めようと思って努力している人に対して、軽蔑したり、馬鹿にする気持ちで、その人の短所や長所を探すようなことはしないようにしましょう。
- ③ 自分を高めようとして努力している人に対して、そんな程度のことをしたって、駄目だよなどがっかりさせるようなことを言ったりしないように気をつけてください。
- ④ これが正しい、あれが間違っているなどと、無駄な論争をするものではありません。

### (2) 積極的に行いたいこと

- ① 人々に対しては、苦しみから救ってあげたいという心を起こしてください。
- ② 真理の師に対しては、深い尊敬の心を持ってください。
- ③ 人々に教えるときは、分け隔てなく教えてください。
- ④ 教えてあげる内容は、多すぎもせず、少なすぎもせず、もっと聞きたいという人に対しても教えすぎないようにしてください。

## 7. 誓願安楽行

「誓願安楽行」とは、すべての人を仏の道へ導こうという誓願をおこし、その誓願に向って、一心に菩薩行を行じることです。

真理を学ぶことも理解することもできない人々がいるけれども、現在の自分では力不足で導くことができないときは、「自分が仏の智慧を得たときには、この人々を、必ず真理の中に引き入れてあげよう」と誓願します。

## 8. 髻中明珠の譬え (庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』 p.142~143)

### (1) ほうびをあたえる

ひじょうにつよいある国の王が、命令に従わぬ国々をつぎつぎに討伐しました。それらの戦いにてがらをたてた将士には、領地や、田畑や、王が手足につけている装飾品など、いろいろな宝ものをほうびとしてあたえました。

### (2) 宝玉だけはあたえない

しかし、王の髪の毛のなかに結いこめてある宝玉だけは、だれにもあたえませんでした。それがあまりにも尊いものであるために、もしそれをあたえたならば、もらった人も、ほかの家来たちも、ただびっくりし、当惑するにきまっているからです。

(3) 法華経を説かなかった理由

わたしが、法華経をなかなか説かなかったのは、ちょうどこのような理由によるものです。

これまでさまざまな教をみなさんに説いてきました。それによって、心が安定して動揺しない境地や、人生苦から超越した境地や、すべての煩惱を除きつくした境地など、いろいろ貴重なものをほうびにあたえました。

しかし、法華経の教えだけはなかなか説きませんでした。説いてみても、みなさんが当惑するばかりだったからです。

(4) 宝玉をあたえる

ところが、この王は、最終的にすばらしい大功をたてたものがあると、まげのなかに結いこめたその宝玉を惜しげもなくあたえるのです。

(5) 法華経を説く

わたしもその王のとおりであって、すでにみなさんの境地がひじょうに高まってきましたので、最後のほうびとして、いまこそ最高の教えである法華経を説いてあげるのです。

## 9. 髻中明珠の譬えの真意

(1) 明珠は頭にある

ほかの宝ものは、王の手足につけたものやたんなる所有物にすぎませんでしたが、その宝玉（明珠）だけは、王の〈頭にあるもの〉でした。頭とは精神(こころ)の宿るところであり、からだ全体を支配するところです。手足などはふつうのひとでも自由に使いこなせますが、精神というものは、いちばん貴重なものでありながら、つかまえどころがないだけに、なかなかの難物です。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.144）

(2) 精神をよりよくする

しかし、この精神というものをしっかりとらえ、調御し、高めていかないかぎり、りっぱな人間とはいえないのです。人生の至高の目的は、〈頭にあるもの〉すなわち精神をよりよくしていき、ついには人格を完成すること(仏になること)にあるのだということを、この譬えからくみとらねばなりません。（同p.144）

(3) 最高の奥義は最後に

初歩の人に、はじめから最高の奥義を教えようとすれば、聞いた人はなんのことやらわからず、とうていついていけないので、ごくごく初歩のやさしいことからはいって、だんだんに修練を積みませたのち、いちばん最後の段階で、ギリギリ最高の奥義をおしえなければなりません。そのことが、この譬えのなかに暗示されているのです。（同p.145）

(4) 基礎的な修行

これをひっくりかえして、修業する側の心得として見れば、〈基礎的な修業こそ、最高の奥義にたっするために必要欠くべからざるものである〉ということになります。(同p.146)

10. 奥義への道

安楽行の実践は、奥義への道にほかなりません。

妙法蓮華の教えを身に行なえば、まっすぐ奥義に向かうことができると信じられるので、安らかな心で、自ら願って、実践することができるのです。

11. 信・戒・定・慧

仏教の修行の道は「信・戒・定・慧」の四つの要素からなっています。

(1) 信・戒・定・慧

① 仏教における「信」とは「信頼する」ということです。仏さまを信頼し、仏さまの説く教えを信頼し、教えを実践する仲間たちを信頼するのです。

前掲(1ページ)の“法華経の教えを心から信じる”のは、この「信」です。

② 「戒」とは「正しい生活習慣」です。身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いを真理に合わせた正しい生活習慣のことです。

前掲(1ページ)の“法華経の教えを身に行なう”のは、この「戒」にあたります。

③ 「定」とは、「真理に集中して動揺しないこと」です。

感情が波立ったり、高ぶったり、貪欲や自分本位の心がはたらいたりしているときは「定」になれません。

前掲(1ページ)の“安らかな心境”は、この「定」にほかなりません。

④ 「慧」とは、「最高の智慧を会得すること」です。

原因・条件・結果・影響の原理を正しく活用して、自分・他人・世間のすべてに善いことを見極めて実践する能力です。

“安楽行”は、智慧の実践です。

(2) 修道

仏道修行をする道を「修道(しゅうどう)」と言い、信・戒・定・慧は、修道の骨格です。八正道も六波羅蜜も、信・戒・定・慧の内容を備えています。

修道を基礎から一步一步辿ることが、奥義への道にほかなりません。

身安楽行・口安楽行・意安楽行は、「戒」に重点をおいた教えです。

誓願安楽行は、信・戒・定・慧を土台にした、菩薩の誓いです。